

ささえあい

<10>

共生未来へ

住まいのヒント

けがをしてから住宅を建てる施設です。その人に替えられました。トイレ、ふろ、食事などの介護が少なくて済むように配慮され、移動には天井走行リフトが設置されました。そのほか、床に落ちた本を拾い上げるため、電話を取り上げるためなど、至る所に工夫が詰まった住宅です。

そんな部屋を紹介されながら、Tさんのお父さんは「洗髪に必要なスペース確保に失敗した。ここを造る前に段ボールでも良いから必要なスペースを確認できたなら……」と残念がられました。その後、同じく家造りでの失敗談を語る何人かの方に出会いました。それから「トライハウス」の構想が生まれました。

「トライハウス」は、Tさんは学生時代に頸髓を損傷され、電動車いすで生活されています。



めぐる施設です。その人に合わなければ、合うまで修正を加えます。トイレであれば、便座の位置や高さ、手すり、トイレの壁などを動かすことができます。

狭いトイレから広いトイレまで、使用する方の

最近新井市に「トライハウス」に近い体験型の展示館がオープンしました。そこで用意されていた体験セットを装着して、右半身マヒの障害を体験させてもらいました。右足と右ひじの屈伸を強制的に制限して、さらに白内障のメガネをかけて、車いすによるかぎ型廊下の移動、スロープの歩行、階段の上り下り、ふるとトイレの使用を試みました。

トライハウス

快適さ徹底的に追求

視野は暗く、右足は重く曲がらなくて、右手は全く使えません。この状態で階段は左足より上り、次に障害のある右足を引き上げ、両足をそろえ、また左足から上ります。下りるときは逆に、右足より下ります。この動作は体験すれば、この方法以外での階段の上り下りではできないことがよく理解できます。

状況に応じて、さまざまなたイレが試しに造られるようになっていきます。その方が本当に自立できる住まいかどうかを確かめるために、本右半身マヒの体験。ベスのポケット、腕、足に合計7・5kgの重りが入っている

短大教授 上越市

(杉田 収・梶立看護